

国際交流基金
日・ASEAN 友好協力 40 周年記念
インドネシア、マレーシア、フィリピン、タイで開催
「Media/Art Kitchen – Reality Distortion Field」展

MEDIA ART / KITCHEN

国際交流基金（ジャパンファウンデーション）は、2013年の日・ASEAN 友好協力 40 周年を記念して、各国の若手キュレーターとアーティストの協働作業を通じて、日本と東南アジアのメディア・アート展「Media/Art Kitchen – Reality Distortion Field」を東南アジア各国で実施します。

コンピュータ技術の発展により、アートの分野において映像やデジタル技術を使ったメディア・アートと言われる作品は増加の一途を辿り、特に近年では、先端的で高額な設備の必要な狭義のメディア・アートのみならず、音や身体表現、日常の身近な現象などとコンピュータ技術が結びついた広義のメディア・アートとも言うべき注目すべき動向も表れ、メディア・アートの領域は拡張しています。日本では60年代から映像表現において様々な実験が試みられており、現在若い世代を中心に分野を横断したクオリティの高い様々な形態の作品が制作され、発表されています。

一方、昨年終了した JENESYS クリエータ招へい事業においては、アニメや映像表現に関して調査するアーティストや技術者が多いことからわかるように、東南アジア各国においても、デジタル技術は90年代後半から積極的に取り入れられて、若いアーティストにとって主要な表現手段となっています。現在アジア各国で行われる国際展にも多くの映像作品が出品され、映像に特化したフェスティバル（「メディアシティ・ソウル」、「OK,ビデオ・フェスティバル」等）も見られ、いまや映像作品の出品されない現代美術展は有り得ないほどです。背景としては、従来の絵画や彫刻といった既存の美術の欧米中心の美術史や概念に囚われない自らのアイデアを表現する身近で簡便なメディアとして採用されたことや、美術館制度が整備されるのが遅かった東南アジア各国において発表の場所を選ばない自由があったことなどの現実的理由がありますが、近年では、東南アジア各国の劇的な経済発展が、大いに技術的側面の向上を後押ししています。別の見方をすれば高額な機材と高度な技術がなければ優れたメディア・アート作品ができないのかと言えば必ずしもそうではなく、初歩的な技術のシンプルな作品であってもオリジナリティ溢れる作品は、我々の心を動かすことが多々あります。さらにまた別の見方をすれば、例えばインドネシアの伝統芸能であるワヤン・クリッ（影絵人形芝居）は民衆の中から生み出された土地固有の映像芸術であるとも言えるわけで、メディア・アートの定義と領域は、世界のアートの動向に連動すると同時に地域の事情を反映して複雑に多様化しています。一般的には科学技術によるグローバルで普遍的な表現手段としての側面が強調されますが、実際にその内実は、個人の固有のイメージとともにその個人が属する共同体の歴史、言語、文化等が現れた表現として、また身体感覚と深く結びついた表現手段として捉えることも可能なのです。

本展では、メディア・アートの分野に強い東南アジアの若手キュレーター・研究者と、日本の同世代キュレーター・研究者が調査と議論を通じて共同で展覧会のコンセプトを練り、日本と東南アジア各国を出自とする作家と優れた作品を選び、現地の諸事情にあった展覧会や関連事業を実施します。含まれるメディアとしては、フィルム、デジタル映像、アニメ、写真、音、パフォーマンス（身体表現）など領域横断的な広義のメディア・アートを対象とします。グローバル化の進む現在だからこそ、メディア・アートという表現手段を通して、日本をはじめこれら関わる国々の土地固有の文化との精神的つながりにも再び目を向けていければ、極めて今日的な共通の課題を提供できるものと考えます。さらに、本展の実施においてはそのプロセスを含めて、今後益々発展する可能性のあるメディア・アートという新しい分野を協働作業の場として提供することを通じて、日本と東南アジアの若い世代間の未来志向的パートナーシップの醸成と次世代の人材育成の場となることが期待されます。

国際交流基金



国際交流基金

■プロジェクトコンセプト

本プロジェクトは、日本、タイ、インドネシア、マレーシア、フィリピン、シンガポール、ベトナム、計7カ国より集ったキュレーター13名が協働して、この時代における「メディア/アート」のあり方を問う展覧会を企画し、順次形を変えながらジャカルタ、クアラルンプール、マニラ、バンコクという4都市で開催するというものです。グローバル化の旗印のもと、国境を越えて刻々と整備更新されていくメディア環境は、これまでにはない新たな経済圏や文化圏を生成しています。それは、大きな変革の端緒ともなり得る一方で、新たな抑圧や格差の広がりを生むリスクもはらんでいます。会場となる4都市の間をとってみても、それぞれの社会背景とその内における「メディア」や「アート」の位置づけは大きく異なります。プロジェクトを通じた各国のキュレーター、アーティスト間の交歓を手掛かりに、互いの差異の大小を一つずつ発見しながら、時には来場者も一緒になって、新たな価値基準を共に編み直す必要も出てくるでしょう。

本プロジェクトでは、いわゆる「メディア・アート」なるものを既定のジャンルであるがごとく見なすことを避け、用いられる高度な技術や流通・受容の経路によって括るのではなく、あえて「/」を配した「メディア/アート」と表記することで、「Media / Art=メディアでありかつアート」、つまり「媒介するものとその技術」と読み替えてみることから出発しました。変転し続けるメディアそのもの、またメディアとの関わり方を理解することによって、いかなる「アート」を実践することができるのか、いかに創造的に生きるすることができるのか。まさにそのことが問われるべき進行形の現在と、待ち受ける未来への展望を描き出したいと考えたからです。

それぞれの状況や環境、必要に応じてどこにでも創出し得る、そして誰もが利用することのできる創造の舞台として、本プロジェクトでは、展覧会そのものを「キッチン」になぞらえました。アーティストによるさまざまな「料理法」や「味付け」にインスピレーションを得る【作品展示】だけでなく、作品やメディアを巡る状況をより深く理解する手掛かりとなる【ワークショップ】、そして来場者自身が思い思いに制作や表現を楽しむ場である【ラボラトリー】。私たちが構想したのは、その3つの柱を兼ね備えた「キッチン」です。

たとえ高価な機材、あるいは特殊な技術や知識にアクセスできなかったとしても、実験的で挑戦的なマインドと、絶妙なスパイスのごとき工夫やひねりを加えることで、見たことも味わったことも無い料理を生み出すアート（術）があるはず。そう信じることで、不可能を可能にしてしまうミラクルな磁場の創出を、この「Media/Art Kitchen」で私たちは試みたいと思います。

岡村恵子+会田大也+服部浩之

■会期・会場

1. インドネシア・ジャカルタ

9月5日（木）～15日（日）【オープニング：4日（水）】：インドネシア国立美術館、キネフォーラム

2. マレーシア・クアラルンプール

10月6日（日）～20日（日）【オープニング：5日（土）】：Map KL (Black Box)、Publika (Art Row)

3. フィリピン・マニラ

11月8日（金）～24日（日）【オープニング：7日（木）】：アヤラ美術館、98B、Green Papaya Art Projects

4. タイ・バンコク

12月20日（金）～2014年2月16日（日）【オープニング：12月19日（木）】：バンコク芸術文化センター

■キュレーター

Ade Darmawan	(インドネシア： ruangrupa ディレクター)
M. Sigit Budi. S	(インドネシア： Serrum ディレクター)
Adeline Ooi	(マレーシア： インディペンデント・キュレーター、ライター)
Suzy Sulaiman	(マレーシア： Digital Art + Culture Festival (DA+C) ディレクター、リムコックウイン大学講師)
Dayang Yraola	(フィリピン： フィリピン大学民族音楽研究センター コレクションマネージャー)
Lian Ladia	(フィリピン： インディペンデント・キュレーター、ライター)
Pichaya Suphavanij	(タイ： バンコク芸術文化センター キュレーター)
Nikan Wasinondh	(タイ： インディペンデント・キュレーター)
Charmaine Toh	(シンガポール： Objectifs Centre for Photography and Film プログラムディレクター)
Nguyen Trinh Thi	(ベトナム： Hanoi DOCLAB ディレクター)
岡村恵子	(日本： 東京都写真美術館 学芸員)
会田大也	(日本： 山口情報芸術センター[YCAM] 主任エドευケーター)
服部浩之	(日本： 青森公立大学 国際芸術センター青森[ACAC] 学芸員)

■プログラム構成

東南アジア 4 都市で開催、展示規模や内容は各都市によって可変とする本プロジェクトでは、鑑賞者の対象を幅広く設定しており、それぞれの見識やコミットメントの深さに応じた楽しみ方のチャンネルをさまざまに用意します（展覧会以外のプログラムは、各開催地の状況を鑑みて選択します）。

・展覧会 ・クリエイティブ・ラボ ・ワークショップ（参加型イベント） ・上映プログラム ・ウェブサイト

■都市別企画概要

1. インドネシア・ジャカルタ

会期：2013年9月5日（木）～15日（日）[オープニング：9月4日（水）]

展覧会・ラボ・ワークショップ会場：インドネシア国立美術館 上映プログラム会場：キネフォーラム

主催：国際交流基金

共催：インドネシア国立美術館、OK.ビデオ-ジャカルタ・インターナショナル・ビデオ・フェスティバル、ルアンルパ

出展作家：萩原健一、堀尾寛太、毛利悠子、八木良太（日本）/Duto Hardono, Krisgatha, Lifepatch, Muhammad Akbar, Narpati Awangga (a.k.a. Oomleo), Reza Afisina (a.k.a. Asung)（インドネシア）/Tad Ermitano, Jon Romero, Cris Garcimo & Erick Calilan（フィリピン）/Bani Haykal（シンガポール）/Nguyen Trinh Thi & Jamie Maxtone-Graham, The Propeller Group（ベトナム）

企画コンセプト：ハードかソフトかを問わず、既存の製品やメディア技術の改変・解体・再編を試みる挑戦的かつクリエイティブな実践を紹介することで、テクノロジーとの批評的な付き合い方を提示する。主会場となるインドネシア国立美術館で同時期に開催する第6回OK.ビデオ・フェスティバルと連動し、「産業の力に抗する消費者：テクノロジーを批評する社会」というテーマを共有する。主として従来型の映像作品を紹介するOK.ビデオ・フェスティバルとの対比を活かして、「Media/Art Kitchen」では、インスタレーションや立体作品を中心にした展示に、クリエイティブ・ラボとも連動したパフォーマンス、ワークショップ、そして上映プログラムを加えることにより、幅広くメディアおよびアートの課題と可能性を楽しみながら考える機会を提供する。



Lifepatch
"MOIST SENSE", 2012
Courtesy of the artist



Mohri Yuko
"CIRCLES (triptych)", 2012
Photo: Hideto Maezawa

2. マレーシア・クアラルンプール

会期：2013年10月6日（日）～20日（日）【オープニング：10月5日（土）】

会場：Map KL (Black Box)、Publika (Art Row)

主催：国際交流基金

出展作家：萩原健一、堀尾寛太、クワクポリヨウタ、田村友一郎、八木良太（日本）／Lifepatch、Narpati Awangga (a.k.a. Oomleo)（インドネシア）／Operasi Cassava、Fairuz Sulaiman、Yap Sau Bin（マレーシア）／Tad Ermitano（フィリピン）／Nitipak Samsen（タイ）／Bani Haykal（シンガポール）／The Propeller Group（ベトナム）

企画コンセプト：新興の集合住宅に隣接し、ショッピングモールを配した Map KL を会場とすることから、「メディア/アート」に初めて触れる観客層にも配慮した構成とする。展覧会においては、日常的なツールのハッキングや、周辺環境を取り込むメディアの活用方法を提示し、生活環境を取り巻くメディアを見直す新たな視座の発見を促す。メディアや表現のあり方に関する専門的なインプットを求める観客層に向けては、背後にあるシステムや社会との関わりを含め、メディアとその用いられ方に対する内省的な思想を提示する。また、来場者が展示作品から受けたインスピレーションを何らかの能動的なリアクションに変換する場としてラボ・ワークショップを位置づけ、単に展覧会を受動的に消費するだけでなく、誰もが自発的な表現を行うことを可能とするキッチン=工房を整えた総合的な展覧会体験の設計を目指す。



Yagi Lyota
"Sound Sphere", 2011
Photo: Atarashi Ryota
Courtesy of the artist and MUJIN-TO production

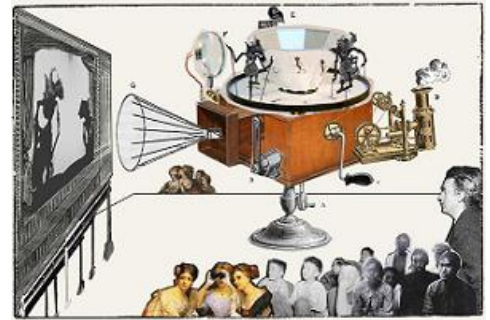


Fig. 82: Beberscope.

Fairuz Sulaiman
"Beberscope" (working title), 2013
Courtesy of the artist

3. フィリピン・マニラ

会期：2013年11月8日（金）～24日（日）【オープニング：11月7日（木）】

展覧会会場：アヤラ美術館

ラボ・ワークショップ会場：98B、Green Papaya Art Projects

主催：国際交流基金、アヤラ美術館（展覧会）

出展作家：萩原健一、牧野貴、mamoru、田村友一郎、梅田哲也、八木良太（日本）／Lifepatch、Anggun Priambodo（インドネシア）／Fairuz Sulaiman（マレーシア）／Ringo Bunoan、Kawayan De Guia、Tengal & Merv Espina、Tad Ermitano、Liby Limoso、Manny Montelibano、Renan Ortiz、Gary Ross Pastrana & Stanley Ruiz、Jon Romero、Cris Garcimo & Erick Calilan、Mark Salvatus & Stephanie Syjuco、Ross Zerrudo（フィリピン）／Chulayarnon Siriphol（タイ）／Bani Haykal、Bruce Quek（シンガポール）

企画コンセプト：「sensorium（=感覚中枢/器官）」というテーマのもと、メディア・テクノロジーを応用することで視覚や聴覚だけでなく、嗅覚、味覚など身体感覚に直接的に訴えかけてくる作品群を提示する。3カ所に会場を分け、それぞれの場所の特性に合わせ、幅広い層に魅力を感じてもらえる構成とする。様々な人が行き交うショッピングモール内にあるアヤラ美術館を会場とする展覧会では、機械的なメディアの力を借りることによって、私たちの身体や知覚がいかに豊かな経験を獲得できるかを体感できる作品を提示する。また、エスコルタの98B、ケソン市のGreen Papaya Art Projects といったオルタナティブ・スペースでは、日本・フィリピン両国のアーティストによる協働プロジェクトを展開し、ラジオ・ステーションを開局するなど、多くの人と情報や知恵を共有する参加型のプラットフォームを構築する。



Umeda Tetsuya
"age 0", 2013
Photo: Matsuo Ujin
Courtesy of Breaker Project



Manny Montelibano
"Biya", 2008
Courtesy of the artist

4. タイ・バンコク

会期：2013年12月20日(金)～2014年2月16日(日)

[オープニング：12月19日(木)]

会場：バンコク芸術文化センター (BACC)

主催：国際交流基金、バンコク芸術文化センター

出展作家：contactGonzo、堀尾寛太、クワクポリョウタ、牧野貴、大友良英、Rhizomatiks、竹内公太、津田道子、梅田哲也、八木良太(日本) / Lifepatch、Narpati Awangga (a.k.a. Oomleo) (インドネシア) / Lim Kok Yoong、Fairuz Sulaiman (マレーシア) / Stephanie Syjuco (フィリピン) / Apostrophy's、B-Floor、Witaya Junma、Mute Mute、Kamol Phaosavasdi、Nitipak Samsen、Sina Wittayawiroj (タイ) / Bruce Quek (シンガポール) / Nguyen Trinh Thi (ベトナム)

関連イベント：[レクチャー] 2014年2月15日(土)

桂英史(東京藝術大学大学院映像研究科教授)

企画コンセプト：「メディアは人の思考を形成し、思考は選択を生む、そして私たちの選択が未来を築く」という思想を根底に据え、アーティストの作品を介して、観客がメディアや技術に対して独自の視点を獲得する機会を提供する。最新のメディア・アート作品や技術の粋を紹介することに主軸をおくのではなく、メディアや技術を活用することでいかに私たちが豊かな生活を築くことができるかを考える。それとともに、ユーザーが自発的にコンテンツを生み出す、あるいは自発的にメディアやアートと関わる場を創出することを旨とする。展覧会場であるバンコク芸術文化センター(BACC)を中心に、その周辺環境を活用して実施するパフォーマンス・イベント「フィジカル3.0」、日本・タイ両国のアーティストの協働によるラボ・プロジェクト「新しいメディア/新しい美学」、そして都市空間にアーティストが介入することで新たな公共の場を生み出す試み「ノクティブズム」など、展示以外にも多彩なプロジェクトを実施することで、メディア/アートの創造力が今後どのような社会を築いていけるかを多角的に探求する。



contactGonzo
the performance for "Performing Histories: Live Artwork Examining the Past", 2013, The Museum of Modern Art, New York
Photo: Choi Kafai



Nitipak Samsen
"Coin Flipper", 2009
Photo: Theo Cook

■ Media/Art Kitchen - Reality Distortion Field ウェブサイト 8月下旬公開予定

国際交流基金の本展覧会 WEB ページ : <http://www.jpff.go.jp/j/culture/new/1307/07-07.html>



日・ASEAN 友好協力 40 周年 □□



国際交流基金

【問い合わせ】

展覧会に関するお問い合わせ：

国際交流基金 文化事業部

アジア・大洋州チーム

Tel: 03-5369-6062 Fax: 03-5369-6038

古市保子 (Yasuko_Furuichi@jpf.go.jp)

鈴木慶子 (Keiko_Suzuki@jpf.go.jp)

広報用画像・取材のお問合せ：

平昌子 (TAIRAMASAKO PRESS OFFICE)

Tel: 090-1149-1111 info@tmpress.jp